有島武郎著作集第十四輯『星座』論序説

―エピグラフ解釈を中心にして―

宮野光男

有島武郎著作集第十四輯『星座』は、大正十一年五月、叢文閣から出版された。有島はこの輯の執筆の経緯について、著作集第十五輯『芸術と生活』(大一一・九)の「書後」で次のように述べている。

それから久しぶりで「星座」第一巻に於て私はまた小説に筆をそめはじめた。創作らしい創作をしなくなつてから約三年を過ごした訳である。「星座」を書くについても、私にはまだ本当のところに自分が立つてゐないといふ感じがしてならなかつた。然し考へてばかりゐることが必ずしも常によいことではない。ぶつかつて行くことも大切だと考へた。私は今年中にはその第二巻を出したいものだと望んでゐる。多分第一巻位の厚さのものが、あと四冊位にはなるのかなと思つてゐる。

〈それから〉というのは、〈今年になって私は「宣言一つ」なる小感想を「改造」に送つたが、それが思ひもよらぬ反響を文壇と思想界とに呼び起した〉という事態の後に、という文脈を受けていることがひとつ、それに加えて第十三輯『小さな灯』(大一〇・四)を世に問うて以来、の意味もあるにちがいない。

有島にとって実生活上の変化は、精神生活の充実をもたらすための基本的な、実効的な手段であったことはすでに見てきたとおりで、『小さな灯』編集のおりの決意――〈作よりも先ず生活の改造〉(「今年は何を書くか」大一〇・一・七)という考えをもっていることからも明らかなことであろう。有島のこの時期に試みたこととして書き並べている、『一房の葡萄』(大一一・六)の出版、個人雑誌「泉」の発刊(大一一・一〇)などは、さらに予定されている『ホキットマン詩集』第二輯(大一二・二)の出版などともに、有島の生活の充実ぶりの証として、あるいはまた充実をもたらす有効な手段として位置づけられようとしていたのである。

〈「星座」を書くについても、私にはまだ本当のところに自分が立つてゐないといふ感じがしてならなかつた〉というように、この時期の有島は、相変わらず危機状況にあったことは、日記、書簡によって明かであり、それは、諸家の指摘しているところでもある。(註一)

なればこそ、〈考へてばかりゐることが必ずしも常によいことで

はない。ぶつかつて行くことも大切だと考へた〉のであろう。「星座」第二巻の予告、その全体構想としての〈あと四冊位〉という目論見への期待の大きさを、と同時に現実には未完成のままに終わっていることの失望感の大きさを思わざるをえないところなのである。

著作集第十三輯は内容からいえば第十五輯につながっている。それはそれぞれの集が評論集だということもあるが、直接的には第十三輯に収録されている「雑信一束」の残り一篇が、第十五輯に「片信」として収録されているということもある。あるいは、第十三輯で明らかにした個性充実、変化志向の実現可能性のひとつの表現としての詩人への期待が、第十五輯のエピグラフ「未来の詩人たちよ」(Poets to Come) においてみごとに表明されているということも見逃しえないことではある。(註二)

そのことは、その中間にある「星座」が、有島の志向した個性充実、変化志向を、詩人性に託して具体的な人物造形のなかで積極的に作品として形象しようとしたものなのだ、ということを示唆していることにもなりそうである。もち論、作品のテーマ分析の方法が多様であることは言うまでもないことであるが、この度もまたこの著作集に付けられたエピグラフ――ホイットマン詩「大道の歌」の一節――の分析を通して、それの果たしている役割、あるいはその有効性について、新しい解釈の可能性を暗示するものが何であるかを明らかにすることによって考察してみたいと思う。

*

ホイットマン詩「大道の歌」の歴史は、「草の葉」の詩群にあって、詩人によって改版のたびにそうとう推敲を重ねられたものであることは、鈴木保昭氏の注解(註三)に詳しい。氏によれば、R・Chaseの説を引きながら、この詩が、ホイットマンの〈独特の声〉、〈「神」への、遙かなる険しい道を行く詩人 Whitman の、まさしく、神々しい姿〉を表現したものだという紹介がなされており、詩としてもすぐれたもののひとつなのである。

有島がこの詩の存在を知ったのは、最初の所持本デビッド・マケイ版によってであろうが、そのおりには、すでにタイトルは「Song of The Open Road」になっており、とくに「大道の歌」のテキストとしては現行のものと、後に具体的にふれるように、かたちのうえでのおおきな差はない。

この詩が近代日本の文学に与えた影響の大きいことについては、諸家の指摘しているところである(註四)が、有島にあってもその例外ではなかったようである。事実、有島のホイットマン詩「大道の歌」への関心については、そうとう早い時期から持たれていたようで、この詩が有島にとってもホイットマン詩の中で関心をもった詩の代表的なもののひとつであったことは、同志社でホイットマンを講じたおり、テキストとして自身が編集した『ホイットマン詩集』(WHITMAN'S POETICAL WORKS 大八・四 警醒社刊)の中に含まれている詩群のひとつであることからも伺い知ることができる。

あるいはまた、初期のホイットマン論、「草の葉（ホイットマンに関する考察）」（大二・七）のなかで、〈大きな尊い美しい〉魂のたえざる前進性を暗示している詩篇のひとつとして、この詩の冒頭の一節、

「足にまかせて心も軽く、私は大道を濶歩する。／健全で、自由で、世界を目の前に据ゑて。／私の前の黒褐の一路は欲するがまゝに遠く私を導いて行く。
是れから私は幸運を求めない――私が幸運そのものだ。／是れから私はくよ〳〵しない、躇はない、又何者をも要しない。／剛健に飽満して私は大道を旅して行く。
（有島による四行の省略）
（而かも私は快い重荷を担ひつゞけて行く。／男と女――それを私は運ぶ、何所に行くにもそれを運ぶ。／誓つていふ私には彼等から遁れる術はない。私は彼等で一杯だ。その代り彼等も私で一杯にしてやる。」（一）

を取り上げているが、これは、有島の魂の〈久遠の光明裡に〉おける〈凡ての魂の行進〉を見ることのできる可能性の表現として、

「魂の流射、／魂の流射は、問題の種をまきながら、木の葉に被はれた門を潜つて、内部から出て来る。／このあこがれ心、夫れは何故であらう？　又夫れと定めがたいこの想ひ、夫れは何故であらう？／何故男女の人達が私の側近く居ると、太陽の光が私の血に漲るのであらう？／何故彼等が私を離れると、私の歓喜の長旒はだらりと細く垂れ下がるのだらう？／何故私がその下を歩く毎に、彼所の樹から偉大な音律的な思想が私の上に降るのだらう？（私思ふに人はあの樹に夏冬をつるして置いて、私が通るとその果を落してよこすのだ）／私が不見識らずの人と突然取り交はすものは何んだ。御者の側に坐って居る時、その御者と取り交はすそのものは何んだ。／私が行きずりに立ち停つて見る、引網を引く漁夫と取り交はすその者は何んだ。／女なり男なりの好意に対して、自由に夫れを受け入れしむるそのものは何んだ。／又彼等をして私の好意を自由に受け入れしむるそのものは何んだ。」
（七）

を掲げていることと関連して、有島の基本的な生き方を表現するためのホイットマン親炙、賞揚の表現にちがいない。有島の願っている個性充実、変化志向は詩人によってまずこのように謳われ、前進を促されていることを知ることができるのである。
そのことを可能にするものが〈魂〉であることは、〈魂の流射〉という言葉によってみごとに表現されている。あるいは、「大道の歌」の最終節、

「行け、大道は私達の前にある！／そこは安全だ――私は歩いて見たのだ――私のこの足が十分に試みたのだ。
行け、躊躇するな！／書かないまゝで紙なんぞは机の上に措いて置け、書物は本棚に開かずに仕舞ひこめ！／道具は工場に、金は

儲けずにほつたらかせ！／学校にも近付くな、教師の云ふ事なんぞには耳を貸さないで！／坊主には勝手に講壇から説教をさせ、状師には勝手に法律を論じさせ、法官には勝手に法をひねくらせて置け！
わが子よ！私はお前に手を与へる！／お前に金よりは少し貴い私の愛を与へる！／説教や法令の代りに私はお前に私自身を与へる！／お前もお前自身を私にくれないか、而して一緒に旅に出ないか。／生きてる限り、お互いにしつかり結び付いていつたら如何だろう。（一五）（註五）

が、〈私の魂〉の、私への促しの言葉として掲げられているのは、前進性、変化志向を受けていることは言うまでもないことであり、さらにそのことが、ホイットマンの、真の個性充実、換言すれば既存の価値体系、制度、組織に対する全否定を旨とする〈常習的反逆者〉であり、〈人生の無政府主義者〉（「ホイットマンに就いて」大一〇・三）であるローファー性の獲得によって実現するものであることを謳っていることへの、有島の同情と共感の顕れであるにちがいない。

もち論、これらの詩篇は、私、つまり有島の、ホイットマンへの呼びかけの表現として引用されているのであるが、それに対して、ホイットマンの、「自己を歌ふ」の最終節〈「私は私の身を塵に委する、而して私の愛する草に現はれよう。／（中略）／私は君を待つて必ず何処かに居るからね。」〉（五二）という答えの唱和をもってこのエッセイ「草の葉」は終わっていることからも明らかであるように、魂との対話が、ホイットマンとの対話という形で表現されることによって、同伴者との共生が、あるいは〈魂〉のもっている表現の向う側にある可能性、絶対者との交感の可能性が、希望を込めて象徴的に語られているところでもあろう。後に触れるように、有島がホイットマンのなかに見ようとしている神秘性とも関わりのあることであるし、これまでに述べてきたように魂の二面性の表現でもある。

このように、有島にとって、「大道の歌」は、有島のわが魂のありようの表現なのである。

このことは有島のホイットマン理解、あるいは期待の、おそらく中心であったにちがいないことは想像に難くない。なぜならば、以後のホイットマン論のなかでも、「大道の歌」は、相変わらず、重要な役割を担わされているからである。たとえば、「内部生命の現象」（大三・七～八）では、「時間を思う」（To Think of Time）のなかの一節〈「楽しく快く私は歩く／何処に歩いて行くのか自分でも知らないが、歩く事のいゝ事なのは知つて居る。／全宇宙もさうだと教へて居る。」〉（八）に加えて第一節の冒頭の部分が引かれていること、「ホイットマンに就いて」（大一〇・三）では、第五節〈今この時から、自由！／今この時から私は制約や空想的な境界線から自らを開放することを命ずる。（以下略）」〉が、初めはエマソンとの会見のおりのエピソード（註六）を紹介するところで、もう一カ所は個性論のなかで、魂の自由を謳歌するホイットマンを表現する詩として掲げられているが、これは第五節の詩に事寄せて、有島自身の〈自由〉への渇望を語っているところで、先にも述べたように、

有島自身の後半生における内面の特色の一面をよく示していることは、この「大道の歌」第五節を通して表現されている有島の自由獲得への熱望が、最後のホイットマン論「ワルト・ホヰットマン」（大一二・二）にまで継承されていることからも明らかなのである。鈴木保昭氏は、この部分が、四節の〈大道を歩く人々の賞讃の言葉〉につづいて、〈自我礼讃、万物容認の思想は、やがて、「自由」の叫びとなって、詩人を勇気ある賢者にする〉、という指摘をしている。（註七）

また、「ホイットマンに就いて」には、先の「草の葉」に引用されていた第七節〈魂の流射〉が、ホイットマンの〈第五番の特色としての神秘的表現についての二三の例〉のひとつとして掲げられているが、これは、放出するエネルギーであるときにそれは人間の愛の発露に与えられた表現のひとつであり、吸引するエネルギーであるときにはそれは宇宙との不思議な冥合のサインでもあることを、魂の〈深い神秘に対するパルス〉として捉えている有島を見ることができるところであり、有島の、「惜みなく愛は奪ふ」における〈奪ふ愛〉論理の展開のなかで、この発想がみごとに生かされていることについては、すでに述べてきた（註八）ところである。その意味で、鈴木氏のミラー氏の言葉として、ホイットマンが、〈宇宙のあらゆるものを包みこみ、いわば、oneness（渾一体）としてしまう、というのである。これがホイットマンのMysticismの特徴である〉と述べているところの紹介（註九）は示唆に富んでいる。

また第十節にある〈若しお前がお前の最上のものを浪費してゐるのならこゝに来るな。病人は駄目だ〉を引いて、ホイットマンの〈健全性〉を述べているところなどもひとつの特色である。もち論、ホイットマンの健全性が、魂のそれを表現しているのであり、〈結局人生の可能性を高唱してゐる〉ことを、そして〈人類は常によりよき現在を持ち続けて行きつゝあるといふ主張〉の表現として、〈魂は旅して行く／肉体は魂ほどに多旅しはしない、／肉体も丁度魂ほどに大きな仕事をし、遂に魂に旅させる為めに離れ去って行く〉（一三）を引くことによって、人間の前進性、同行志向、同伴志向を持った存在であると同時に、肉体が魂にとって永遠の追随者ではなく、その本質において決別してゆくものであることへの共感を示していることは、ホイットマン論の展開の方向を見定めるためにも興味深いことである。とくに「ワルト・ホヰットマン」は、有島のいわゆるホイットマン離れのひとつの顕現として位置づけられている（註十）ことを思うときに、一方ではそれまでのホイットマンとの同行志向、同伴志向がその本質として継承されながら、他方その文脈のなかからホイットマンへの決別が謳われていることに、つまり自由の発露としてのそれが謳われているところに、ホイットマン離れの真の意味が何であつたかを問わなくてはならないことを示していることになるのである。（註十一）

＊

ところで、ここにひとつ、エピグラフとして採用されている部分について興味深い問題がある。それは、有島がエッセイのなかで、

「大道の歌」第一節を引く場合、（二回引いているのであるが）著作集第十四輯『星座』のエピグラフとして引かれている部分を含む、

大地――大地は自足してゐる、／私は星座等が更らに近くにあるべき必要を見ない、／私はそれらが極めて正しい所にあるのを知る、／それらに属するものはそれらに満足してゐるのを知る。

の四行、つまり第一節の八行目から十一行目（マケイ版では、定稿の第六行目がないので、七行から十行ということになる）を、省略していることである。

この部分は『草の葉』のいずれの版にも存在しているところであって、テキストの種類による欠落の問題ではない。とするならば、この省略はあくまでも有島の意図によるもので、このところに、この四行のうちの三行、つまり九行目から十一行目、マケイ版では八行目から十行目までをエピグラフにして引用していることについて、有島の積極的な意図を読みとることができるのである。

この引用のしかた、つまり、有島が、エッセイにおいて「大道の歌」第一節を引くときの、四行の省略があるという引用のしかたには、有島にとって、まず心引かれているのが、その同行志向、同伴志向とともに、前節で述べた前進性、人間のかぎりない前進の可能性への共感であり、そのことへの讃意の表明というところに焦点が絞られていたということが顕わにされているように思われるのである。

〈道〉が、その意味ではまさに象徴的な表現なのである。初期のエッセイ「二つの道」（明四三・五）から始まって晩年のエッセイのひとつ、「独り行く者」（大一一・七）に至るまで、〈道〉は有島の人間としての歩にとって最大の関心事だったことを想起すべきところであるが、ホイットマン詩にあっては、〈道〉は、旅を、航海を、そして人生を象徴する言葉であり、これらの言葉が重要な役割を果たしているものであることはすでに指摘されている（註十二）ことである。そして、有島もその影響下にあった作家であったことは指摘してきたところである（註十三）が、可能性追究の具体的な表現であるこれらの言葉の反措定として、〈荒野〉を取り上げなくてはならなかった有島の自己認識における否定は、ホイットマンを越えた――すくなくともホイットマンにあってはスタート地点に可能性として位置づけられているのに対して、有島の場合、一種の到達点に位置づけざるをえなかった――ことを最もよく顕していることになるのである。

道はなし世に道は無し心して荒野の土に汝が足を置け

絶筆のひとつとして知られているこの短歌に表現されている道喪失感、換言すれば〈荒野〉という自己認識（註十四）は、有島が最後までカインの末裔意識に苛まれていたことの象徴的な表現であり、それはホイットマン詩「大道の歌」への傾倒ぶりを通してその内容をより明確にすることができることになるのである。

このことは、「大道の歌」第一節のエッセイへの引用部分が、有島の人間観における肯定性を表現する媒介であったのに対して、省

略された四行、つまり、エピグラフとして掲げられた三行は、第一節の中にあって、ホイットマンには連続であったものが、有島にとっては非連続の、異質の内容をもったものの表現として受けとめられていることを表しているように思われるのである。

大地――大地は自足してゐる、／私は星座等が更らに近くにあるべき必要を見ない、／私はそれらが極めて正しい所にあるのを知る、／それらに属するものはそれらに満足してゐるのを知る。

この省略されている四行は、『カインの末裔』のエピグラフ「天然に帰る瞬間よ」の世界、あるいは『或る女』のエピグラフ「ある卑しい売春婦に」の世界である絶対受容の可能性を、あるいはまた『惜みなく愛は奪ふ』のエピグラフのひとつである「私自身の歌」の一節、〈私はありのままに存在する〉の顕している絶対的自己肯定の可能性を思わせる表現なのである。（註十五）つまり、否定的自己認識を一挙に肯定へと転じせしめる可能性、あるいはその根元的エネルギーを予測させる存在がその背後にあることを望みとして抱いていることを表現している四行なのであって、ホイットマンのいう大地の自足性によって象徴的に表現されている人間存在の、あるいはまた魂の直接的な肯定性を前提としたところの人間讃歌ではない、いや少なくとも有島は、そうではないものとして受けとめていたにちがいないことを顕にしているところなのである。つまり、著作集第一輯から始まって、各輯に付けられているエピグラフの背後にある愛の可能性、換言すれば有島の自己認識における否定を肯定に転じさせる愛の可能性によって支えられなくてはないないことを暗示する詩句なのである。

有島が、「大道の歌」以上によく取り上げている「私自身の歌」（註十六）に顕わされている絶対的肯定性のひとつの表現である〈私はありのままに存在する〉、あるいは〈私は不死〉が、有島の愛唱の詩篇であったことを想起することができるところでもあろう。〈一人称の自我礼讃は、詩人にとって、相手、二人称の自我、更に三人称の自我、そしてそれぞれの複数、つまり、すべての人のそれぞれの自我礼讃に通じる。そして、更にそのような人間肯定は、地球、大地の肯定に、更にもっと飛躍し、宇宙の肯定にと高まる〉（註十七）ためには、絶対的自己肯定か、さもなくば、それを可能にするものへの絶対的信頼が求められるところなのである。

*

キリスト教信仰を棄てて人間の愛の可能性追求を志向した有島は、自らその歩みを振り返りつつ、実感として〈これから一人で出懸けます。左様なら。〉と、けなげにも独りで出発しなければならない者であったことは「『リビングストン伝』第四版序」（大八・二～四）において明かなことである。さらに追い打ちをかけるように、ホイットマンに促されて〈私は彼れを離れて行かう。（中略）彼れをして彼れの道を行かしめよ。それを妨げるな。私達は私達の道を行かう。彼れをしてそれを妨げしめるな〉。（「ワルト・ホヰットマン」）〈ローファーは何処迄も被迫害者として進んで行く一団で歴史

のソコにひそんで居る一つの流れである。此生命の流動が歴史の中にあることが唯一の宝玉である故に私はローファーに対してひそやかな感謝の盃を捧げ度いと思ふ〉（「独り行く者」大一一・七）と独り行く者であることを宣言した有島にとって、意識的にはそれは独歩独行を旨とするローファーたらんとした者の当然の帰結であり、むしろ積極的な意味のあることであったにちがいない。晩年のエッセイ「独り行く者」は、まずその文脈において捉え位置づけなくてはならないものであろう。と同時に、それは好むと好まざるとにかかわらず、孤独存在認識の――換言すればカインの末裔存在意識の再確認だったのである。（註十八）それは、エッセイ「独り行く者」のサブタイトルが、〈ローファーと主義者との争闘〉となっていることが何よりの証明であるし、文中、制度教会を越えたキリストが、〈ホイットマン以上にローファー〉であり、愛の実現者であることを述べ、そのローファーは、先にも引いたように、〈何処迄も被迫害者として進んで行く一団で歴史のソコにひそんで居る一つの流れである。此の生命の流動が歴史のうちにある事が唯一の宝玉である故に私はローファーに対してひそやかな感謝の盃を捧げ度いと思ふ〉、という意味で有島の理想像であることを確認していることからも明らかなことなのである。

つまり、このところに有島のいうところの〈カインの末裔〉性と、ローファー性との接点としての位置づけが可能になるのである。なぜならば、この輯のホイットマン詩「大道の歌」による〈道〉の可能性追求の文脈において捉えられる道断絶感、あるいは道喪失感、換言すれば〈荒野〉性の認識からの回復可能性の提示部としての四行であることを、有島はこのときすでに鋭く察知しているのである。だから、ホイットマン論においては、この四行を敢えて意識的に避けて引用したのであり、それがいま『星座』のエピグラフとして再確認を求めて復活せしめられているのである。つまり有島がエピグラフとして揚げている「大道の歌」第一節の三行は、「星座」が、有島によって模索されているカインの末裔の復権の可能性を、詩人性の獲得に併せて、改めて問おうとしている作品であることを示しているのではないか、ということになるのである。

*

今日までに、このエピグラフについて触れたものとしては、山田昭夫氏の〈（前記引用のホイットマンの詩には）宇宙的スケールにおける直感的な予定調和の思想が窺える。このホイットマンの詩と『星座』との関わりをどのように推察するかは問題であるけれども、大自然の厳粛なる事象に深く打たれるところのあった有島とすれば、その予定調和的な思想が『星座』全容をその背後から支えんとした窮極の思想であったかも知れない。さりながら、『星座〈第一巻〉』に登場する人物たちの中には、ホイットマン流の予定調和の思想をもってしては御し得まいと思われる者もおらないではない。また予定調和的な思想や平衡感覚ほど有島に欠如していたものはないという異見も有り得る。いずれにせよ、『星座（第一巻）』の世界は、不定未解決の様々な「若い生命力」のドラマがようやくその相貌を現わしはじめたところで中絶しており、それらは未だ渦雲状態を脱し

ておらぬというべきであろう。〉（註十九）という発言があるが、氏の言われる〈予定調和説〉の可能性の根拠が、有島にあつて、いかにしてリアリティを持ちうるのか、あるいはまた、そうではありえない有島であることの指摘をも含めて、いわばその〈渦雲状態〉ともいうべき混沌――荒野性――をいかに超えていくことができるのか、ということが、「星座」論のポイントのひとつとして問われていることになるのである。

＊　＊　＊

なお、有島によって省略された四行の初行〈大地――大地は自足してゐる〉が、エピグラフでは、さらに省略されている問題については、視点を〈星座〉に限定するための省略であろうが、次の章で詳述する予定である。

【註】

註一　①西山正一「『星座』の中核的問題――有島文学崩壊の道標として――」（国語と国文学」昭和三〇・一一）　②紅野敏郎「有島武郎――『星座』覚え書――」（「明治大正文学研究」昭和三一・一）　③安川定男「『星座』について」（『有島武郎論』昭和四二・一一　明治書院刊所収）　④内田満「『白官舎』から『星座』へ――作品と創作過程についてのノート――」（「平安女学院短期大学紀要」昭和五三・二）　⑤福田準之輔「『星座』未完の理由はなにか」（国文学」昭和五三・九）　⑥拙論「有島武郎研究――著作集第十三輯『小さな灯』を読む――」（梅光女学院大学「日本文学研究」第二八号　平四・一一）

註二　有島の詩への期待については、本論をはじめとして、「有島武郎の詩と詩論」の中心テーマであるが、それの一種の結論として著作集第十五輯『芸術と生活』論を位置づけることができる。その意味では先に発表した「『宣言一つ』試論」（解釈と鑑賞」平元・二　所収）は有島武郎著作集十五輯『芸術と生活』論序説である。

註三　「ホイットマン『大道の歌』小論」（『大道の歌～ホイットマンの「愛」の讃歌』（一九八七・一〇　翔文社刊改収）

註四　①佐渡谷重信『近代日本とホイットマン』（一九六九・一〇　竹村出版刊）　②鈴木保昭『白樺派の文学とホイットマン』（昭和五二・七　東京精文館刊）　③吉武好孝『ホイットマン受容の百年』（昭五五・四　教育出版センター刊）など。

註五　「草の葉」定稿では、最終節は〈一五〉になっているが、マケイ版によった有島の訳では第十三節が四分割されて一七節になっている。内容についてはマケイ版所収の第十四節の冒頭部四行の省略があるだけである。

註六　杉木喬訳「ボストン・コンモン――さらにエマソンについて」（『ホイットマン自選日記』（下）昭四三・六　岩波書

店刊所収）

註七　註三に同じ。

註八　「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（三）――本文分析を中心にして（2）――」（梅光女学院大学「日本文学研究」第二五号　平元・一一）

註九　「ホイットマン文学におけるMysticismとIdealism」（註三に同じ）

註十　①岡田愛子「有島武郎とウオルト・ホイットマン――その邂逅・有島武郎におけるホイットマンの変遷――」（「国語と国文学」昭三六・十）②鈴木鎮平「第七章　訣別」（『有島武郎におけるホイットマンの相貌』昭三五・六　明治書院刊所収）

註十一　「有島武郎研究――「詩への逸脱」をめぐって――」（六）（梅光女学院大学「日本文学研究」第一六号　昭五五・一一）

註十二　清水春雄『ホイットマンの心象研究』（昭四三・一一　篠崎書林刊）

註十三　「有島武郎研究――著作集第十二輯『旅する心』を読む――」（梅光女学院大学「日本文学研究」第二七号　平三・一一）

註十四　「有島武郎研究――著作集第五輯『迷路』をめぐって」（一）（梅光女学院大学「日本文学研究」第十七号　昭五六・一一）

註十五　①「有島武郎研究――『詩への逸脱』をめぐって（二）」（昭五一・一一　梅光女学院大学「日本文学研究」第一二号）②「有島武郎研究――著作集第八、九輯『或る女』をめぐって――梅光女学院大学「日本文学研究」第二七号　平三・一一③有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（一）――エピグラフ解釈を中心にして――）」（昭六二・一一　梅光女学院大学「日本文学研究」第二三号）

註十六　註一〇の②に同じ。

註十七　註三に同じ。

註十八　註一の⑥に同じ。

註十九　山田昭夫「『星座』解題」（『有島武郎全集』第五巻　昭和五五・一一　筑摩書房刊所収）